
運命物語

運乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命物語

【Nコード】

N3383Z

【作者名】

運乃

【あらすじ】

ある年の冬、柵橋市たなはしでは放火殺人のニュースが騒ぎになっていた。家一つをまるごと焼くほどの火が町では数日置きに見られ、火の町と言われるほどに連続していた。同時に町ではもう一つの事件、連続殺人でも騒いでいた。犯人が捕まらない二つの事件が平行して起きる柵橋市。市民の不安が強まる中で再び放火事件が起きた。和井かずい正吾しんごの家が燃やされ、そして生き残ったのは正吾のみだった。生き残った正吾は引き取り手もなく、しばらくの間施設に送られることになるが、次々に不可解な現象に巻き込まれていく……。悲しみの

運命が回りだす現代ファンタジー

ブログ「運命からあなたへの手紙」(前書き)

不定期更新になりますが、週末や連休の更新が多くなると思います。なるべくないようにしますが、思いつきなどで書いてしまうため、ご都合主義になってしまう所もあるかと思いますが、そこはぜひ辛口な評価をしてみてください。

初めてなのでアドバイスとか感想とかもらえたら嬉しいです。あと、遠慮なく辛口コメントしてみてください。お願いします。

プロローグ「運命からあなたへの手紙」

あなたは自分の運命が分かっただらどうしますか？

幸せに暮らしている未来だとしたらそのまま歩いていきますか、それとも決まっている幸せは嫌だとそれすらも変えてしまいますか？

不幸な未来だとしたら幸せな未来に変えてしまいますか？

自分は幸せでも周りの人間が不幸になる未来へ変えますか？

もし自分の運命が誰かに操られていると分かったら、その運命を変えていこうとしますか？

もしそれで運命を変えられたとして、その先に死ぬことが分かっているとしても、あなたは自分の運命を変えますか？

運命に逆らい、死にも逆らい、未来を掴むための地獄へと。あなたは進めますか？

世界から憎まれようとも、未来へ……

by 運乃

1話：始まりの火種

暗く深い青色にでも塗られたような空に星が瞬く。

あまりの寒さに、少女は肩をすくめてコートを着直した。冬に入り寒風が町を駆け抜けることが多くなり、コートやジャケットなくして夜の外は歩けなくなっていた。

寒い。少女の呟いた声で外の寒さが明らかになる。言葉と一緒に出た白い息が、ふわっと、軽やかに夜の闇へと消えていった。

少女が扉に広告のチラシが張られた家を曲がる。曲がると街路灯に照らされた住宅街の道が少女を出迎えた。少女はそのまましばらく住宅街の中を歩き、門が備えられた白い建物に入った。門の所に『ひばり児童養護施設』と表札がある白くほどほどに広い建物だ。

少女が透明のガラスになっっている扉を開けて中に入る。扉の上についている鈴が鳴った。中は物寂しい外見とは違った、柔らかく温かみのある匂いに満ちていた。

「ただいま」

扉を閉めた少女の声に一人の女性が奥から飛ぶように走ってきた。

「お帰り未来ちゃん。大丈夫だった？」

いかにも心配している表情と声色の、髪の毛を揃えて結わいた30代の女性が未来を心配そうに見つめる。

それに反して汚れた茶色い革靴を脱ぎながら未来が聞き返した。

「大丈夫って、何かあったの？」

「また放火魔が出たみたいなのよ。今テレビでやってて、」

「そ」

玄関で騒ぎ立てる女性の話を流して未来は歩き始めた。

「未来ちゃん」

「ご飯は食べてきたからいらない。あとその話もいいから」

女性にそう言って後の言葉を無視する。触れられたくないと言わんばかりに女性を突き放し、未来は一際明るい部屋を目指した。

そんな未来の後ろで女性が寂しそうな顔をして溜息をついた。

いつも未来はこうなのだ。ここの職員とは最低限の会話をするだけであまり話をしない。構われることに慣れていないのか、ただただ嫌いだと思っっているのかの区別もつかず、職員全員を困らせる問題児になっていた。

廊下を歩きながら未来は女性が職員専用の部屋に入っていくのを横目で微かに見ると、目的の部屋へと視線を移した。

様々な絵や注意事項が貼られている壁がある部屋だ。ここの皆が遊んだり話しをしたりする場所でもある。ここに一日一回でも顔を見せないと心配される体調チェックの場所でもあった。

そこから聞こえてくる声に未来は眉を寄せた。

テレビも置いてある部屋だが明らかに話している。しかも、未来が聞きたくはない声のような気がした。

その部屋の入り口に立ち、未来は中に向かって明るい声で言った。

「皆ただいま」

「未来おねえちゃんお帰り！」

「お帰りー」

暖かい部屋の中にいる七人の子供の声が一斉に未来を向いた。未来が子供達にもう一度ただいまと返す。と、同時に未来は部屋の中で、子供達の前に座る黒いコート姿の男を睨むような目つきで見た。

睨まれているコート姿の男が振り返る。

「未来ちゃんお帰り」

「あんたなんで来たの？」

せつかくの笑顔を向けた男に対して、未来が愛想の欠片もない返事をした。未来の目付が磨かれた刃物のように鋭さを増す。

そんな未来に物怖じもせず男は未来に話しかけた。

「近くまで寄ったから、様子を見にきたんだよ」

「じゃあ、用は済んだでしょ。早く帰って」

「そんなこと言わなくてもいいじゃないか」

「……私部屋に戻ってるから、皆も早めに寝てね」

しょんぼりとする男を無視して、未来は男の傍にいる子供達にだけ言った。

部屋を離れようとする未来に、子供達が口々に駄々をこねる。

「お姉ちゃんも一緒に話聞こうよ」

「私未来お姉ちゃんと寝る」

「ほらほら未来ちゃん、皆もこう言ってるしさ」

未来が開いた手をあげて横に振った。

「じゃあね、おやすみ」

男ではなく子供達におやすみを言って、未来は部屋から足早に遠ざかる。部屋から遠ざかりながら、寄せた眉間も離していく。

未来は男の事が嫌いなのだ。話すことすら嫌で、近寄るのはもつてのほかだった。

別に男の人が苦手というわけでない。部屋にいた男、その人間だけが未来にとつては受け入れられないのだ。男の存在自体、未来にとつては許せないともいえるほどに嫌っていた。

帰宅早々になんで、と未来が機嫌を損ねて自分の部屋に戻った。

自室のドアを開けて中に入る。煌々としている明かりに未来はしよがないと言葉に出す代わりに溜息をついた。

部屋を出る時は消灯が原則だった。誰もいないのに点けているのはもったいないからだ。しかし、それとは別に一番の理由があること、ということも未来は知っていた。

経費削減。なるべく節約したいというのが職員の本音だ。お金がないのだここの施設は。

それをここにいる小さい子達はよくわかっていない。お金の話などは小さい子達にはまだ関係ない。

だからこそ、節約する部分を“もったいない”で教えるのが未来の役目だった。それすらも未来には面倒に感じられるのだ。

それでも教え方が悪かったと反省しつつ、未来は傘のような電灯から垂れ下がる紐を引っ張った。パツと明かりが消えて部屋が暗くなる。ほとんど何も見えない。

しかし、部屋は三人が入って何かできる程度の広さ。決して広くはないため、場所と感覚で覚えれば暗くても移動はできた。

暗中の部屋で未来は感覚を頼りにベッドへと近寄った。そして自分のベッドに入り、未来は自分を覆うように布団を被った。被ると陽に当たったような温かな匂いが布団からした。

布団を干した証拠に少しだけ満足して、目を瞑りさつき聞いたことを頭に浮かべる。

連続放火魔。最近町で噂になり、実際に起きている凶悪事件だ。

この一か月以内で五つの家が燃えている。そして今日も起きたらし

いという。それで六つ目。嫌な事件だ。

眠ろうとする未来の頭に外からカンカンと騒がしい音が響いた。町の中でほぼ連日といってもいいくらいに鳴るサイレンの音だ。毎夜聞きなれた音に未来は耳を塞いだ。

自分の嫌いな男がいるのに、それでいてうるさいサイレンの音。

未来の怒りの火種が燻り始めていた。

赤い粉が雪のように地面に落ちた。コンクリートに落ちた火が分厚い靴に踏みつぶされた。

火の粉が放たれる炎に向かって、勢いよく水が噴き出される。見るからに重厚そうな服装をしている人達が、長いホースを持って一斉に炎へと水を掛けていた。

水を掛けられてもさらに火が強まる炎が、不気味に煌めいて揺れる。まるで効かないとでも言っているかのような笑みにも思えた。

そんな炎から離れたところ、炎に立ち向かう消防員達の後ろには、人々が炎の行方を不安そうに眺めていた。

見守られる炎に、見守る人々。そんなたくさんの人ごみをかき分けて、一人の少年が炎の近くへと走った。しかし、一瞬にして警察二人にその行く手を阻まれた。二人に抑えられた少年が暴れまわり叫んだ。

「どいてくれっ！ 親父もおふくろも華もばあちゃんもじいちゃんも、皆が中にいるんだ」

「待ちなさい。君が行ってもこの炎じゃ助けられないだろう。消防隊が今全力で消火と救助をしてるから、絶対に助けるからここで待ってるんだ」

制止する警察官の声にも負けず少年が尚も暴れまわる。

「親父、お袋！ まだ中に、皆が、」

「おい、君大丈夫か!？」

「どうしたんだ!？」

二人の警察官に凭れるようにして少年がダラリと崩れ落ちた。二人に抱きかかえられる少年の目が虚ろに炎を睨みつけた。

消してやる。そして、家族を助けるんだ。その思いだけで少年が警察官に抱えられた中で立ち上がった。支えられる手をどけて少年が一步踏み出した直後、大勢の目の前で炎がその息吹を上げた。大爆発でもしたかのような音を立てて炎の勢いが増した。

真っ赤に燃え上がる炎。その憎々しい光景を目に焼き付けて少年は瞼を閉じた。

「お、おい。救急隊この子を運んでくれ」

遠ざかる意識の中で、少年の頭にサイレンの音が馬鹿みたいに大きく聞こえる。体が浮く微かな感触と共に、飛び交う色んな話し声の中で一つだけ鮮明な声が耳に入ってきた。

「そうして少年は病院に送られるのです。チャンチャン」

少年にだけ聞こえた声が救急車のサイレンで掻き消される。

燃え盛る炎を後ろに救急車が走り出した。サイレンの音が、少年が戻らないとも言っているかのように遠ざかっていった。

2話：火事の翌日

棚橋市の中でも一番大きな病院、ひがしたなざわびょういん東棚沢病院。昔からある病院でほとんど全ての科があり地域でも有名な所だった。

その三階にあるとある病室。その付近にいた全員が朝早くから驚ろかされた。一声によって。

「嘘だ」

少年の大声。廊下にも響き渡るほどの怒鳴り声がある病室から轟いた。その声に病室にいた全員がそちらを迷惑そうに見て、病室の付近にいた全員が異様な目つきを病室に当てた。

異様な目つきで見られたその病室は三百四号室。そして迷惑そうに見られた本人は、その窓際にあるベッドで、枕を腰掛にして座っていた。

大声を出した少年は白い掛け布団の上に視線を落とした。その目の前ではいい歳をした医師が項垂れる少年を見下ろしていた。

静かになった少年に医師が今言った事の事実を述べる。

「本当なんだよ。昨日の火事で、」

「嘘だ。あれは夢だった」

医師が少年にもう一度夢でないことを伝えた。

「夢じゃない。君の家は火事にあった。そして、君以外全員……」

少年がしばらく何も言わずに座っていると、医師が慰めるように言った。

「まだ受け入れられないかもしれないが少しずつでもいい。けどこれは、」

「生きてんだろ。皆……」

視線を下げてままたま呟いた少年に、医師も悲しげな表情で言葉を返した。

「昨日の今日だ。受け入れられないのも当然かもしれない。話した私が悪かった」

「……………犯人は」

少年が同じ声、同じ姿勢で聞いた。

「犯人は、誰だか分かってるんですか」

「それは分からないままだ。警察が必死になって捜査してる。すぐに捕まるよ」

医師の言葉に少年が何度も頷いた。

それを見て医師は少年に対する懸念を口にした。

「憎む気持ちは分からなくもないけど、復讐してやろうと思ってるならやめたほうがいい。復讐したとしても君のためにもならないし、家族も浮かばれない。それは、分かるね？」

無言のまま少年が続けて頷いた。あえて顔を見せないように俯いている気が医師はした。

「後でまた来るから、それまで大人しくしてるように」

去ろうとする医師に少年が呟いた。

「華は来年中学生になるって喜んでたんだ。ばあちゃんもじいちゃんもやっとな落ち着いたからって来年の旅行楽しみにしてたんだ。なのに……」

吐くように呟いた少年に、医師が何も言わず病室から出て行った。医師も周りの患者も声を掛けることができなかった。家族が連続放火の犠牲になったのは、少年で四人目だった。だからこそ、どう声を掛けていいか分からなくなっていた。

周りから同情の眼差しを向けられる、少年の目からぼつと涙が零れた。落ちた涙が少年の足に掛かる白い布団をほのかに湿らせた。

朝十時の起きたての体で、未来はカーキ系のダウンジャケットのチャックを上げた。

体は温かいのに、頭が寒い。そんな体の矛盾に可笑しさを感じる。同時に、耐えられない寒さに身震いを起こした。

今日は九回目、十回目のこの冬一番の冷え込みなのだ。だから、言うまでもなくものすごく寒い。が、未来はこの冬一番の寒さという言い方を可笑しいと思っている。

天気予報ではこの冬一番というのを秋の終わりからずっと言っている。しかし、それを寒い日が訪れるごとに毎回改めて言っている、一体いつが寒いのか分からない。そもそもこの冬一番というか

らややこしくなるんだ、と未来は天気予報とその予報士に、いつも心の中で文句を垂れていた。

寒さで嫌々起こされて不機嫌なまま、手提げのバッグを手にぶら下げた。これからすぐに出かける予定だった。

しかし、その前にと未来は遊び場である部屋に立ち寄った。いつも皆に一声かけるのが日課だからだ。

未来が部屋に入った途端、待っていたかのような声と近寄ってくる足音が出迎えた。

「未来お姉ちゃんおはよう！」

「お姉ちゃん今日も寝坊だよ」

未来の前で子供達の声が幾重にも重なる。ここにいる子供たちの相手をよくすることがあるためか、未来は子供達には人気者だった。目の前でごちゃごちゃに飛び交う子供達のおはようを聞いて、未来は一瞬不審に思った。いつもとは違った声調。それにどこか皆の雰囲気暗い。明るい声だけど、表情がいつもとは違ったのだ。

それを気に掛けつつ未来は笑顔で返事をした。

「おはよう。それとごめんね。今日も出かけるから皆と遊べないんだ」

謝る未来にそれぞれ浮かかない顔をした。やはり何かあったのかなと思う未来に、一人の男の子が言った。明るくて元気だけどすぐに泣いてしまう男の子で、皆からユウくんと呼ばれている子だ。

「お姉ちゃん大変なんだよ」

「どうしたの？」

聞き返す未来に子供達が口々に言った。

「火事があったんだよ」

「ホウカマが出たんだって」

「お家がゴオツって燃えてたの」

「それで消防車から水がバアーって」

四方八方からまたも飛び交う声に、未来が今度は頷いて受けた。そして皆の言葉を受け止めつつ、悟られないほどの小さな溜息をついた。

先週もこんな風に騒いでいた気が未来はしたのだ。しかも同じような騒ぎかたでだ。けれど、たった一つだけ違うことがあった。それは明らかに怖がっている表情が濃くなっているということだった。しかし、それも当然のことだった。

連続している放火は昨日起きたので八件目。そのうち全員死んでいるのが四件、生存者がいるのが四件だった。

その週に一回は起きる火事。それを警察が関連があると発表してからすぐに、町中に連続放火という言葉が、まるで火のように広がっていった。

そのせい、連続放火が騒がれた二ヶ月前から、町では消化訓練や火の取り扱いにかなりうるさくなった。うるさいを通り越して神経質なくらいに。

しかし、そうなったのも連続放火のせいではなかった。何よりその火事以外の小火だけなら二日に一回は必ずあるのだ。

そのためか火事のニュースが毎日のようにテレビで流れ、ほぼ連日でサイレンの音が町を駆け巡っていた。

火事のニュースやサイレンの音で大人が不安になるのだから、子供が怖がらないはずがなかった。

口々に火事の話をする子供達に未来が相槌を打ったり、怖いと言
う子へニコリと微笑んだ。

「大丈夫。お巡りさんがすぐに悪い人を捕まえてくれるから。そし
たらまた町が静かになるよ」

本当、と聞いてきた女の子に未来は母親のような笑みでコクリと
頷いた。

それでも子供達の怖がっている表情に変わりがないことを、未来
は確かに感じ取った。

もう一度大丈夫と優しく、今度は力強く言っ、出かけてくるか
らねと付け足し部屋の外に出た。

大丈夫といいつつも、出かけるたびにここが放火されないことだ
けを未来は心配していた。帰ったときに家がなかったら、と出かけ
る前に嫌な想像が頭をよぎるのだ。そんな想像すらしたくもないの
に。

少しばかり暗い表情で廊下を玄関へ向かって歩いてみると、

「未来ちゃん」

そう呼びかけられて未来は振り向いた。

未来を呼んだのは二十代のメガネを掛けた女性。今年から新しく
入った職員で、人当たりの悪い未来には何度も泣くような思いをさ
せられている。それにも関わらず根気よく話しかけてくるこの女性
には未来も少しだけ感心していた。

ほとんどの職員が、刺々しい未来に話しかけることの意味を感じ
なくなっている。それを未来自身感じているためか、今では小話が
テキストにしか返事をしていない。そんな自分に毎日飽きずに話し

かけてくるこの女性を、未来は好奇的な人物として少しだけ気に入っていた。悪い話さえもってこなければ。

呼びかけられた直後、未来は玄関へ続く廊下へと向き直り歩き始めた。話の内容に想像がついた。

高校生の自分。そして平日の十時。掛かってくる所は一つだった。しかも、掛けてくる人物も分かっていた。

「今学校から電話があつて。今日は、」

「出かけるからまた今度」

「少しだけでもいいから、顔見せてあげたりとか」

女性の言葉を聞き流したかのように未来は玄関でブーツを履いた。随分前から履いている毛がついてふわふわしている茶色のブーツだ。もちろん学校の革靴ではない。

履き終えて玄関の扉に触れた。そこで未来はもう一度呼びかけられて女性に答えた。怒りを込めた言葉で。

「先月に行ったでしょ。出かけるって言ったから、それじゃあ」

「未来ちゃん！」

女性の言葉が未来の閉めた扉の音で遮られた。項垂れる女性の姿に見向きもせず、冬晴れの言葉が似つかわしい空の下、未来は学校ではない場所へと歩き出した。

時計の時刻が十一時と十七分変わった。

十二月の日差しが少しばかり汚れた白い地面に反射して光る。

病院の屋上とは別に設けられたテラス。空中庭園を模したようなその場所で、患者や医師など病院に関わっている人間が日向ぼっこをしていた。天然の暖房に冷やかながら澄んでいる空気。それらを少しでも感じたいという人がこのテラスに集まっているのだった。

その中に一目で落ち込んでいる雰囲気かすいしよつこの少年改め、和井正吾の姿もあつた。

「和井くん、そろそろ病室に戻りましょう」

「はい……」

正吾は看護師に言われて、重たそうな腰をやっと椅子から上げた。立ち上がった正吾がテラスをノロノロと歩く。一気に歳でもとったかのような鈍い動きで。

正吾が迷ったように看護師へ問いかけた。

「あの、中に入ったら病室まで一人で行っていいですか？」

看護師が躊躇って考え込む。医師から少年のことをあまり一人にしないようにいわれていたのだ。それに付け加えて病室まで送るのも自分の役目。けれど、誰かに付きっ切りでいられるのも嫌だろうと、看護師が答えを迷っていた。

少し長い返答待ちに、正吾も一人で行けないなら行けないでいいと思っていた。

看護師が正吾へと少しだけ首を傾けた。

「一人で大丈夫？」

「はい」

「それならいいんだけど、ちゃんと病室にいてね」
「はい……」

意外な返事に正吾は今できる最高の笑顔で頷いた。といつても、微笑にもならない笑顔だ。

そうして中に入り、テラスからまっすぐの清潔にされた廊下の丁字路まで正吾は看護師と歩いた。丁字路で看護師が右の廊下へ、正吾は左へと向かう。

その前に看護師がもう一度正吾に言った。

「あと少ししたら昼食になるから、それまで病室で待っててね」

その言葉に正吾はまたできるだけの笑顔で答えた。

正吾が左にある自分の病室へと向かう。首を前に傾けて自分の影と磨かれて傷のついているタイルを見つめた。

今日で何度心配されているか分からない。その中にはいらぬ気遣いも含まれていた。新聞やニュースをできるだけ避けるようにされたり、話題に出さないような気遣い、そして自殺しないかという心配までされていた。そんな気遣いに対して、事件のことを告げてくれた医師の方がよっぽどいいと、正吾が思うほどだった。

そうやって気遣われるのも、心配されるのも全てが忌々しい記憶のせいだった。

夜半に起きた火事。誰かによって家に火をつけられて家族が死んだのだ。自分以外の五人が。

それを聞いてからさつきまで、正吾は少したりとも信じなかった。信じる気にもならなかった。が、緊急だと押し掛けた警察の事情聴取で正吾は自分が見た物が正夢だったことを知った。いや、無理やり知らされたのだ。家族が確かに死んだことを聴取で何度も言わ

れたのだから。

警察に火がつけられた時のことを聞かれて、正吾は正直に遊びに出かけていたと答えた。火事の時正吾は友達とゲームセンターで遊んでいた。自分の家が燃えているとも知らずに。そもそも分かっていたら遊んでなどいかなかった。その後悔してもしきれない中で、いろいろと聞かれ、正吾は自分を責められているようにも感じた。悪いのは自分だったのかもしれないと。

そんなことを思っているうちに、正吾は足元にある自分の影が憎く思えてきた。目の前にある影が犯人のようにさえ思える。そんな錯覚が正吾を襲っていた。本当に火をつけたのは自分ではないかと自分が、犯人が、自分が、犯人が、やった。

頭の中で響く声に握り拳を固めた瞬間、一つの足音が正吾の後ろでキュツと足音を鳴らして止まった。

「ねえ、ちょっといい」

病院の廊下に突然女性の声が発せられる。が、それに気づかず正吾は自分の影だけを見続けて歩く。

「ねえ、俯いてるあんた。ちょっといい」

怒ったような声にようやく正吾は頭を上げた。そして自分の病室に目を向けた。まだ少しばかり遠くにある。自分の戻る場所だ。

「そこの暗そうなあんたに言ってるんだけど」

イラついている声にようやく正吾は声の方向へと振り返った。今呼ばれた気がして。

正吾が振り返ると、そこには眉間に皺を作った眼光鋭い少女が立

っていた。

口を一字にしていて、ムスツとしているようにも見える。が、笑えば可愛いこと間違いなしの顔の持ち主だった。顔から肩に覗く髪は艶やかな黒で、肩にかかるほどだ。スタイルも良くアイドルだったとしても可笑しくはなかった。

そんな少女が正吾に鋭い視線をぶつけている。こちらが何か悪いことでもしたかのような、向こうが喧嘩を売っているような視線。一瞬で怖さを覚える少女に正吾は聞いた。

「なんだよ……」

聞き返した正吾に、少女は飛ばしてた眼つきも眉間の皺も、溜め息を吐いて消し去った。

「君気を付けた方がいいよ」

「なんで」

意味の解らない言葉に更なる恐怖を正吾は感じた。誰ともしれない少女に気を付けると言われて、警戒しない人間がいるはずがなかった。

少女が何ともなしに、正吾をぞつとさせることを言った。

「君から嫌な臭いがする。火で何かを焦がしたような焦げくさい臭い。それに火をつけた時のモワツとした臭いもする。だから気を付けた方がいいよ」

「……」

不気味なことをいう少女のせいで正吾は床を見た。火の臭い。そ

れに気を付けた方がいい。馬鹿みたいだった。既に手遅れだと言いつ返そうとして、しかし、言えなかった。火事が起きたことを咄嗟に指されて、まだ反論できる余裕などなかったのだ。

黙る正吾より先に少女が口を開いた。

「何かあったの？」

正吾が言い返すこともせず沈黙を続けた。

立ち尽くしている正吾に少女は迷ったふうと言った。

「……何かあったなら十分に気を付けた方がいいよ。こういう臭いつて続くから。引き留めてごめんね。気を付けた方がいいことだけ伝えたかったただけだから。それじゃあ」

少女が勝手気ままに一しきり忠告すると、本当に少しの微笑と手を振って去っていった。

去っていった少女の姿を見ることもなく、看護師に呼びかけられるまで正吾はその場で立ち尽くしていた。

日にあたる自分の影になぜ自分じゃなかったのかと。なぜ燃やされたのが自分の家だったのかと。犯人を同じ目に合わせてやりたい。そう思いながら、自分の影を見つめていた。

3話：未来の頭痛機嫌

ガキンガキン。ガンガンガン。

採掘をしているかのような、製鉄所のような金属を叩く音が響く。頭の中で。

「未来お姉ちゃん、大変だよ。今日ここに」

「ユウくん、しーっ。お姉ちゃん今頭痛いんだから向こう行って」

小さな声で叱る女の子の声とユウくんが扉を閉める音。それが未来の頭の中ではいつもより大きく聞こえた。

その原因がまた未来の頭の中で反響した。割れるほどでもない頭痛。それが起きた未来を朝から何度も襲っていた。

頭痛はするが風邪の症状がない。熱すらない。ただ今日は調子が悪いだけなのだ。

鳴り止まない頭痛の音に、未来の苛立ちが募っていく。それでもまだ起きた頃よりはマシになっているのだった。

未来の眠るベッドのまん前。左右相對するように置かれたベッド。その上に座る女の子、優奈が未だに布団に丸まっている未来に声を掛けた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「……寝てれば大丈夫だから。それよりユウくんは何を言いに来たの？」

優奈が未来のぶつきらばうな言い方に言葉を選ぶ。

長くここにいる優奈にとって、未来は一番頼りになる姉のような存在だった。その反面、機嫌が悪いときは一番居たくない相手でも

あった。そのため体調や機嫌の悪い時は優奈もあまり未来に話しかけないようにしている。変な災難を呼びたくはないのだ。

「えっと、今日ここに新しい子が来るっていう話。未来お姉ちゃん昨日早く寝ちゃったから、聞いてなかったでしょ。だから知らせにきたんだと思うんだけど。今じゃなくてもいいのにね」

未来からの無言の返答。優奈が最大限の未来の不機嫌さを知った。無言のそっだよね、が壁際のベッドから聞こえてきたような気がしたのだ。

それに未来が知らせに来たユウくんを恨んだ。変なとぼちりが自分に来るかもしれない。

優奈がそう思った時、意外な言葉が壁を向いて丸まっているであろう未来から飛んできたのだ。

「今日？」

「うん。男の子が一人。十二月中旬の今ってビミョーなときに入ってくるよね」

またも無言の返事が優奈に向けられた。

そして、言いたくなかったことが未来自身の口から出たことに、優奈が驚きの声をあげることになる。

「それって私が紹介するの。ここを？」

その瞬間、優奈が驚いて肩を跳ね上げた。体調の悪そうな声と鋭く刺すような声。それが優奈の驚怖を湧き上がらせた。そして、布団で見えない目がこちらを睨んでるような気まだったのだ。

曖昧な返事で、しかし未来の言ったことを否定することなく優奈が頷いた。

「でも、できなかつたら皆でするし」
「いい。適当に説明するだけで終わらせるから」
「じゃあ、逸見^{へみ}さんに伝えていい？」
「うん」

未来の頷きに優奈がベッドから降りて部屋を出た。

逸見さんはここに長くいる職員の人で、軽いパーマのかかったショートヘアが似合う四十代の女性だ。こないだも火事があった時、帰った未来のことを心配して軽くあしらわれた。が、当人二人はどちらもあり気にしていない。昔からあることだったからだ。

優奈が出て行った後の部屋で残る未来は重たい頭を体ごと持ち上げた。再び痛みが頭を刺激する。まるで、常時なる目覚まし時計が頭の中に入っているみたいな感覚。非常に寝覚めが悪かった。どうにか起き上がった未来が勉強机の上にあるカレンダーに目をやった。

今日は十二月の十八日で土曜日。あと十三日で今年も終わりという日。そんな今日の曜日に未来は頂垂れた。

いつも行く予定の場所が今日は開いていない。そこが開いていたら面倒な案内役を引き受けなくてもよかったのだ。そもそも、新しくこの施設に入ってくる子が今日でなければよかったのだ。頭が痛い今日でなければ。

イライラと溜息をつきたくなるような思いが混沌と渦巻く中、ノックする音に未来は返事をした。

部屋の中に入ってきたのは女性の職員、逸見^{へみゆづか}百合香だった。皆からは逸見さんや逸見おばちゃんと呼ばれている。四十代前半でおばちゃんと呼ばれるこの女性を未来は可愛そうだと思っていた。見た目は若く見えるのだ。不思議なくらいに。

入ってきた逸見が扉を閉めながら未来に尋ねる。

「寝てるって聞いたけど大丈夫？」

「見ての通り何とか生きてる」

「死ぬほどの頭痛だったの」

「要らない話があつて死にそうになつたけどね」

冗談と用件を交えて二人が話しをする。話しながら、逸見が未来とは向かい合う様に優奈のベッドに座った。

座る時に一度腰を浮かせるようにして座る。それが逸見の癖であることを未来はかなり前から知っている。一度だけなぜそう座るのが聞いたことがあった。その理由がつまりない理由、と口に出すほどつまらなかったことを未来は思い出した。

「また」

「いいじゃない。癖だもの。それより、月曜日に火事があつたでしょ？」

聞かれた途端に未来はピンときた。優奈の言葉を思い出し、不機嫌な目つきを逸見に向けた。

「今日入ってくるんでしょ？」

「あら、聞いてたの？なら早いわね」

逸見が必要な部分だけ言う。未来のこの目つきと態度には慣れているのだ。

「あなたと同じ高校生で男の子。柵橋高校にいつてるから顔くらい見たことあるんじゃない」

「いちいちその辺の顔なんて覚えてないから、多分知らない。向こ

うがどうかは知らないけど」

そう、と逸見が相槌を打って話を進める。未来が会話で嫌いなのが無駄話だからだ。

「部屋は男子のほうね。他のことはあなたが説明して」

「適当でいいでしょ。あとは暮らしてるうちにわかるんだし」

「うん、それでいい。ただ必要最低限のことだけは説明してあげてあと、あなたから何かあつたら説明していいから。そこは任せる」

未来がわかるほどの溜息で逸見に答えた。面倒くさいと。

しかし、それも気にせず逸見は続ける。一番重要なことを。

「でも、事件のことで深く傷ついているから優しくしてあげてね」

逸見の言葉に未来がより一層目を鋭くさせて言った。

「同情しろってこと？」

「未来っ」

「冗談よ。分かってる」

未来が微笑を浮かべて肩をすくませながら逸見へ返した。怒ることを分かって言ったので、未来は気にしていなかった。

「それで今日のいつくるの？」

「もうすぐ来るわよ」

本当に急な話だと未来が逸見とその少年に内心で舌打ちした。いつも急にしか話をしてこない逸見はともかく、これから来る少年は急すぎた。今さっきまで寝ていたため、まだパジャマ姿なのだ。

頭痛のイラつきと少年の転居に未来の不機嫌さがさらに増す。

「じゃあ着替える」

その意味を察して逸見がベッドから立ち上がった。

「はいはい。着替えたなら遊び場にいて。その子が来たら呼ぶから」
「来なくてもいいんだけど」

部屋から出ようとしている逸見に未来が憎々しい口調で返事をした。

そんな未来に逸見がしかめっ面を向けた。

「未来。ちゃんとしてよ？」

「ほどほどにね」

まったく一言置いて逸見が部屋から出て行った。頭痛もあつてか今日の未来は頗る機嫌が悪かった。

未来が適当に着替えて、遊び場へ向かった。いつも朝に立ち寄り部屋だ。

「おはよう」

と、一言だけ言う。おはようが返ってくるのを確認して未来はすぐに部屋を出た。

今日部屋にいる子は全部で三人。優奈とユウくん、そしてユウくんと同じ年で七歳になったばかりのマキちゃんだけだ。あとは全員遊びに行ってるか何かだった。

静かな施設。とてもいい雰囲気なのにこれを台無しにするイベン

トが未来を待つていた。

案内などの説明は未来にとってはあまりやりたくないことだったが、今いる三人に任せると騒がしくなることは想像しなくてもわかった。

静かにしてほしくても騒ぐのだから、新しく誰かが来るといいういべントで大人しくしているほうが奇跡だといえた。

逸見が未来自身に任せたのも単に他にやることがあるからだ。なければ自分でやったはずだった。未来の予想では。

未来が施設の中を少しだけ歩く。少しばかり引いた頭痛のおかげで、頭が軽くなった気がしていた。

暇つぶしに歩いた後、未来が玄関の廊下の壁に寄りかかった。

早く終わらせたい。そして、今日は寝ていたい。

その思いだけで玄関で待つことを未来は決めた。遊び場からどうせここに来る。それを考えたらここで待っても同じだと考えたのだ。

そして逸見の言葉と自分の思いを心の中に浮かべた。

これから来るのは火事で家をなくした少年。ニュースで見た限りの少年に家族は一人もいない。全員死亡したらしかった。そもそもいたらここにはまずこない。孤児院兼自動養護施設などに来るはずがない。

何よりどちらかというと来ないほうがよかった。少年のためにもけれど、家族がいない上に、身寄りがないなら一時的でも仕方ない。

それが少年の、と思いかけて未来は気づいた。

立っていたのだ。透明なガラスの入ったドアを開けて、広い玄関スペースに二人。職員一人と見知らぬ少年が。

手荷物を持ったまま少年が軽く頭を下げた。

「はじめまして。俺、かずいしちゆう和井正吾。よろしくな」

笑顔ではきはきと挨拶する同い年ぐらいの少年、和井正吾。
その少年を一目見て、未来は口元を少しだけ緩ませた。
案外、平気じゃない。そう感じて。

4話：案内

「ここが遊び場。遊んだりお菓子食べたりぼーっとしててもいい場所。何してようと勝手だから皆大体ここにいるか自分の部屋にいるかね」

「他の部屋は違うのか？」

「同じなのは各自の部屋だけ。後は風呂場とか台所だからできないかな。まあそこで過ごしたいなら別に誰も文句は言わないだろうけど」

未来の説明に少年が唸るように頷いた。さっきから説明が大雑把過ぎてよくわからないのだ。

「未来お姉ちゃん」

呼びかけられた未来が中にいる三人を手招きした。正吾と未来の前に三人が集まると、未来は優奈に指先を向けた。

「この子は優奈。今中学二年生で私の次に年長。分かんないことあったらできれば優奈に聞いて」

「またそうやってお姉ちゃん私に押し付ける」

優奈の言葉を聞き流して未来は自己紹介を促した。説教されると逃げるのも未来の悪い所だった。

「これからよろしくお願いします。眞井優奈です」

「よろしく。俺は和井正吾。えっと」

「私と同じ年だから」

未来の一言で三人が声をあげた。

「やったね。皆お兄ちゃんだよ」

はしゃぐ三人を放って未来は紹介を続ける。

「こっちがユウくん、こっちがマキちゃん。二人とも同じ年で七歳。今年小学校に入ったばかり」

「正吾お兄ちゃんよろしくね」

「お兄ちゃんどこのお部屋？」

「もう決まってるの？」

「ユウくん達のとこ空いてるからそこでいいって」

四人の会話に正吾が置き去りにされる。

そのことに気付いて未来がユウちゃんとマキちゃんの二人に手をかざした。

「また後で。あと部屋に行ってくるだけだから、すぐに戻ってくるから話すならその時にね」

未来の言葉に満足してないと言わんばかりの二人が軽く頬を膨らませた。

「僕も行く」

「私もー」

「ダメって。お姉ちゃん具合悪いんだから。未来お姉ちゃん私代わるよ？」

「いい。二人のこと見てて」

そうして正吾と未来が遊び場から廊下に出て自室の方へと向かう。

正吾が今の話を聞いて未来に尋ねた。具合が悪そうには見えなかったからだ。

「具合悪いのか？」

心配そうな表情で聞く正吾に未来があっさりと答える。

「心配ない。ちょっと頭痛がするだけだから」

本当にあっさりと答えた未来に正吾が聞き直した。

「風邪なのか？」

「じゃないみたい。片頭痛かなんかだと思うけど。そのうち治るから心配しなくてもいいから。よくあるのよね。嫌な予感のする時って」

未来の意外な言葉に正吾が関心を示した声を出した。

「へえ。じゃあ頭に感知器でもついてんじゃないのか？」

「だとしたら取り外したい。予感がするたびに痛くなられても困るし」

未来の笑みに正吾もようやく肩の力が抜けた気がした。玄関から先、二人で歩いて説明や会話をしてても未来は一度も笑っていないかったのだ。それが遊び場での会話で微笑を見せ、今初めて二人の会話で笑ったのだった。

正吾がよかったと安堵の表情を浮かべた。

その直後、未来が立ち止り正吾も倣って足を止めた。

何かと未来を見た正吾は、目にした顔が前を睨んでいることに気

付いた。それも怒っているのが分かるほどに眉を寄せて。

正吾が前に目をやると、部屋の扉が点々と並ぶそこに、スーツ姿にコートを羽織った三十代ぐらいの男が歩いて向かってきていた。それに気づき、そして明らかに少女がその男を睨みつけているのがわかり不思議な顔を浮かべた。

その横の未来が怒気を声に表して男へ放った。

「何か用でもあるの？」

男が二人の前に立つ。すると、未来が更に嫌な顔を男に向けた。そんな未来へと男が苦笑する。

「いや、ちょっと立ち寄っただけだよ」

「いつも何の用があるの。変態」

「変態って失礼だなあ」

「いつも顔見せる人なんていないから。誰か攫う子でも探しに来てるのかなって思ってる」

未来に対して男もしかめっ面をした。半ば犯罪者扱いされているのは遺憾に感じ、憤りすら感じられた。

「そんな犯罪じみたことするわけないだろう」

「じゃあ、何の用よ？」

「だから、元気にしてるかなって。それよりその子新しく入ってきたのかな？」

男に言われて未来が隣へと目を移した。

途端に正吾がその口から出た言葉に驚かされる。

「……あと優奈に聞いて。私出てくから」

「え、出てくつて?」

聞き返した正吾に対して未来がクルリと反対を向きながら言った。

「出かけるってこと。じゃあね」

「ちよつ、」

言いかける正吾の事を無視して未来が進む。男と正吾とは反対の方向へと。

「おい、具合悪いんじゃないのか」

「治った!」

怒鳴るような声をあげて未来が二人の前から早足で去っていった。残された二人はそれをぽかんと呆れて見送る形になった。

夏場の天気みたく晴天から豪雨に様変わりした少女に正吾は呆れていた。会ってからまだ三十分ぐらい。それだけの時間でここまで喜怒を見せる少女は初めてだった。

呆然として佇む正吾に笑いを込めた声が後ろから聞こえた。

「嫌われてるんだよなあ」

苦笑しながら頭を掻き、見たまんまに困ったような男の方へ正吾は振り返った。

見た目は完全に三十代を超えたオッサン。だが、どことなく若いようにも見える。三十代手前と言っても可笑しくはなかった。剃り残したような顎鬚が似合っていないければ。

複雑な気持ちで男を見ていた正吾に男は興味津々な目を向けた。

「君は今日からここに?」

領き名前を名乗った正吾に男はあつと一声上げた。

「忘れてたよ。俺の名前未来ちゃんから聞いた？」

首を横にした正吾にならと男が言った。

「俺、七五三」

「七五三？」

聞き返す正吾に男は自慢でもするかのような口調で喋る。

「珍しい名前だろ。全部数字で、七に五に三でなごみって読むんだよ」

七五三という男に正吾はへえと関心のある声を出した。

「三十三年間同じ苗字にあったことがないのが自慢なんだよな」

そう言った七五三という男の歳がここでわかり頷いた。

三十三歳。正吾はその見た目に妥当だなと思った。四十なら若いと思ったが、三十ならそれぐらいかとしか思わなかった。

正吾が歳を聞いて興味を失くした瞬間、再び男に惹きつけられた。

「それより君さ火事のことでもいい話聞きたいと思わないかい？」

その言葉に正吾は目を見開いた。いい話と言ったこの男が何か知っている。自分の家族を奪ったあの火事のことを。

正吾の顔が微妙に変化したのを感じてか、男が微笑を湛えた眼差しで正吾の目を見た。

「もしかして、君事件の？」

「はい……何か知ってるんですか。犯人の事とか」

正吾が聞くその姿勢に男は一度宙へ目を逸らした。まるで、突っかかるかのような聞き方だったからだ。

「聞いた話だけだけど、それでもいいなら話すよ」

それでいいと頷いた正吾に男も首を縦に軽く振った。

「それじゃ自室で話そう。そっちのほうで君もいいだろ？」

「その方がいいですけど、まだ場所がどこだか。ユウって子の部屋なのは聞いたんですけど」

「ユウくんの所か。分かった」

男が続けて正吾に着いてくるように言った。男に従って正吾が後をついて行く。そして一人で納得した男に正吾は問いかけた。

施設内に詳しいことが気にかかったのだ。

「ここにはずっと来てるんですか？」

「まあね。知り合いが昔ここで世話になってからずっと来てるよ。その知り合いはもう死んだけど、彼がここにきていろいろ援助してやってほしいって、最後に言われてね。俺もこの事はほっとけなれって思っただけ、それ以来かな」

それから部屋に着くまで二人が少しばかり話した。男がサラリーマンであることや、本人が悲しむほどに結婚できないことなど。ほとんどもが男の話だったが。

そうして目的の部屋にたどり着き二人が中に入った。

部屋の中に入ると真正面に窓があり、その脇には机が二つ置かれていた。そして壁際にはベッドが二つあった。二段ベッドと一段のみのベッドの二種類だ。

それなりに片付いている部屋の中に正吾が入り、改めて今日からここで暮らすことを感じた。朝はここで起きて全員で食事をして、その後でそれぞれが自分の時間を過ごす。学校に行ったり遊びに行ったり。そうして自分たちの部屋に戻り眠る。そんな生活がしばらく続くのだ。

「ドア閉めて。話すからさ。荷物は適当に置いといていいと思うよ」
言われて正吾は我に返った。正吾が入口近くにバッグを置き言われた通りドアを閉めた。

男が窓の左、入口から見て左側の勉強机の椅子に腰をおろした。正吾はどこに座ったらいいか分からないまま、とりあえず一段ベッドに座った。

「俺が知ってることだけは話すからさ。君が求めている物じゃないことかもしれないけど」

正吾はそれでもいいと首を縦に振った。

男は胸ポケットに手を伸ばし、煙草を取り出そうとして止めた。子供部屋はもちろん禁煙だからだ。空の手椅子の背凭れにかけて男は正吾の方を見ながら言った。

「俺が知ってるのはさ、犯人像と今日火事があるってことなんだよね」

驚きの声を漏らす正吾に男は冷静な口調で続ける。

「誰も知らないけど、犯人はどうも中学生らしいんだ」

「中学……」

「ああ。連続放火の犯人は中学生。だから君の家族を奪った犯人も同一だと思うよ。他の小火は知らないけど」

正吾はガツクリと肩を落とし、握り拳を爪の跡が残るほどに作つた。

「最初は遊び半分だったんだろうけど、スリルとか楽しさを求めた結果大火事になったってとこじゃないか。今のは俺の予想だけ」

そんなと声を震わせた正吾に男は黙りこんだ。俯く正吾の顔が怒りで染まっているのが見えたからだつた。

正吾がバツと顔を上げた。怒鳴る声が飛ぶ。

「そんなものの為に、俺の家族は死んだのかよ！」

怒りを露にする正吾とは正反対に落ち着いた口調で正吾に言葉を返す。

「俺は犯人の動機なんて知らないよ。知りたかったら今日確かめたらいいんじゃないかな」

「どういふことだよ」

冷めない怒りをぶつけてくる正吾に男は答えた。

「今日の夜に放火するって話を聞いたんだよ。場所までは分からないけど確実だ。俺のことを信じるなら今日の夜街を歩いてみたらいい。本当に確実だから」

信じられないような事を言う男。それに正吾は目線を自分の足元

に戻した。

今日の夜火事がある。そんな予感がするのではなくそれを人から聞いたという男を正吾は信じられなかった。信じられるはずがなかった。

「どうしたいかは君が決めるとして、俺からの情報はこれだけだ。後は何も知らないからさ」

そう言うと男は椅子から立ち上がった。正吾は一瞬見ただけですぐに視線を戻した。

下を向く正吾に男は一言付け足した。

「分かっているとは思うけど、捕まえるのはいい。でも復讐してやるうとか同じ目にあわせてやるって思うのは間違いだよ」

正吾の肩を軽く叩き男は部屋を出て行った。

男が出て行った後も正吾はそこから動きもせず、自分の足元に目を向けていた。

火事の話が本当なのかどうかと、男の言葉により信用と不信の間に揺らされながら。

5話・運命との出会い

闇夜が蠢いているかのような空に煌々と輝く月が浮かんでいる。住宅街の街灯の光を消せば月が導きの光みたく見える月夜の綺麗な夜。一人歩く少年の足元が街灯から注がれる光で照らされた。

ダウンジャケットのポケットに手を突っ込んで歩く少年ことかずい和井正吾。防寒対策を施した正吾が寒空の下を歩く目的は一つだった。

自分の家族を火事で奪った中学生を探すためだ。だが、正吾は既に諦めていた。

一時間以上住宅街をうろついているにも関わらず、怪しい人物はいなかったのだ。会うのは家に帰るサラリーマンや家族連れ。その他色々とすれ違い見かけるなどしても、火事とは全く無縁そうな人間しかいなかった。それどころか当てもなくふらついている自分の方が不審者みたくなっていることに気付き止めようと思っていたのだ。

寒さに震える正吾はデマの根っこである人物を恨んで舌打ちをした。

昼間にこれから先暮らすことになった施設であった初見の男、七な五三。それに今夜火事があると言われ、七五三の話を聞いたのだ。そして話を聞いた最後に今夜火事が起こるかもしれないと言われ、犯人に近づけるかもしれないと外に出たのだ。

犯人に家に火をつけた理由を聞ける。その犯人を捕まえる。そう意気込んだ結果、七五三の言葉を半信半疑だった正吾の期待を大いに裏切る結果になった。案の定犯人はいなかったのだ。

人の噂話に自分の勘。そうそう当たるはずがない物を信じただけ

だと、正吾は自分に言い聞かせ、施設のある方へと足先を向けた。馬鹿だと自分に悪態をつきながら。

悔しさ半分怒り半分。何の解消にもならない混濁した気持ちを抱えたまま、正吾は住宅街の石壁を左に曲がった。

その瞬間、正吾は首を傾げるような光景を目にする。

一軒家が連続するこの住宅街。正吾がいるまっすぐな道が続くその途中で、薄明かりに照らされた人影がある家の前でしゃがんでいたのだ。家の前の人影が動く。

不気味に思いながら帰り道だから仕方ないと正吾が近づこうとして足を止めた。怪しい人物の目の前でポツと火花が散ったのだ。

同時にその人物の顔が浮かびあがり男だと正吾にはわかった。

一軒家。しゃがんでいる怪しい人間。ポツという音に火花。それらが一瞬で正吾の頭にあることを連想させ、次に正吾はその人物に向かって叫んでいた。

「お前何してんだ！」

正吾の声にびっくりしたのか不審者である男の手から何かが落ち、カラリという音がした。落とした物を慌てて拾った男が正吾の方を向き立ち上がる。そして正吾の方へと歩きだした。

不気味に近づいてきた男の顔や背格好に正吾は驚いた。

そこにいた人物は確かに男だった。だが老いを感じさせるものではなく、どちらかというとかなり若い、中学生ぐらいの少年だったのだ。

少年とわかると正吾は一瞬で誰だか悟った。

犯人はどうも中学生らしいんだ。七五三の言葉を正吾は思い返した。連続放火の犯人が目の前にいる。それだけで正吾は自分の体が強張るのを感じた。

正吾に怯えられた少年は鋭く怪しげなその目つきを正吾に向けてなぜか笑っていた。

気味の悪い少年に正吾は同じことを、今度は最大の警戒心をもつて聞き返した。

「お前何しようとしてたんだよ」

「見ればわかるだろ。火をつけようとしてたんだ」

何とも思っていない。そう言わんばかりの言葉。そして真顔で自分を見るその姿に、正吾は底知れない恐怖を突きつけられたような気がした。

少年の言葉に正吾は自分の胸にある憎悪を確認するように口を開いた。

「お前が連続放火の」

「そうだよ。今日で九件目なんだから邪魔するなよ。それともお前も一緒に燃えるか？」

正吾の顔に驚きと恐怖が満ちる。

普通に考えれば用もないのにライターの火をつけたまま人に近づくことなどしない。ましてや、一緒に燃えるかなど聞く人間はいない。何より自分で放火魔と認めた。その発言から真面じゃない、本当に放火魔なのだを知った。

その瞬間正吾の頭に二つの選択肢が生まれた。この場から今すぐにも離れること。もう一つはこの少年をどうにかして捕まえることだ。

だが、どちらを選んだとしてもかなりのリスクがあった。真面じゃない少年がどうするか分からないという最悪のリスクが。

少しばかり少年との距離があるその間で決める。そう決めた正吾

は少年にある事を問いかけようとした。自分の家族を奪った理由を。放火するその理由を。

目の前の不敵に笑う少年に正吾は問いかけるために口を開いた。その瞬間、

「なんで放火なんてするんだ。怯える少年Aはそう叫んだ」

突如聞こえた謎の声に、二人が辺りを見回した。

聞こえたのは少女のような声。二人がいる道にはそれらしき人物はいない。それどころか人っ子一人いない。

「二人がどこだどこだと声を頼りに辺りを探す」

再び聞こえた声に二人がある家の方を向いた。その家は二人がいる所から左というすぐそばだ。そして、家の塀から上を見て二人の顔が驚きに満ちた。

二階建ての家の屋根。斜面になっていいる屋根の縁。軒先の所で今にも滑り落ちそうな格好の少女が悠然と二人を見下ろして座っていたのだ。夜空に澄みきって美しく映える月の姿を背に従え、手には小さなノートのような物を持ち、足をぶらりと投げ出して。

突如現れたその少女に正吾は疑問を投げつけた。

「お前誰だよ。こいつの仲間か」

屋根についた左手を口元に運び少女はクスリと笑って正吾の問いに答える。

「私は運乃^{うつの}。それとそいつとは仲間じゃないわ。そんな馬鹿みたいな事する奴私知らないもの。ねえそうでしょ？ 放火魔の少年B」

問いかけられた犯人の少年は正吾と同じことを聞き返した。

「お前一体誰だよ」

「同じこと言わせないで。私の名前は運乃」

聞いている意味が違っていると正吾が言うと、運乃は口を一文字に結んだ。答える気がない。そう言っているかのような少女に正吾はもう一度問いかけようとしたその瞬間、口が開かず叫ぶような声を発した。口の違和感に正吾が戸惑って慌てる。

運乃は左手に持っていたペンを指差す様に正吾に向けた。

「駄目じゃない。同じこと三度も言わずに“セリフ”通り喋らないと。“運命”に決められた通りにね。じゃないとあなた、この状況で死ぬことになるわ」

「なんだと……!?!」

「よかったじゃない今度は喋れて」

その瞬間運乃は持っていたノートにペンを走らせた。凄い勢いで走り書きでもしているかのように。

正吾が怪しげな少女から視線を放火魔の少年に一旦戻した。途端に正吾は体を真横に投げるような形を取った。

「ぐっ」

正吾の体の横を、手にナイフを持った少年が通過した。避けられた少年はふらつき、正吾は地面に体を倒す。倒れた痛みを堪える正吾に少年が近づく。

「お前死ねよ。その後は屋根にいるお前だからな」

少年が運乃と正吾に手に持つナイフを向けながら言うと、正吾の

方へと向いた。

足元の近くにいた血走った眼でナイフを握る少年。それに立ち上がって向かって行ける力が正吾からは抜けていた。どうにかして立ち上がらないといけないと分かっていても体に力が入らなかったのだ。

恐れる正吾の目にナイフを持つ少年並みの衝撃が飛び込んできた。少年の後ろにある家。その屋根で笑みを浮かべる少女の姿が正吾の目に確かに映ったのだ。走り書きをしていたのも止めてノートからペンを放している少女の姿がそこにあった。

それを不可思議に思う正吾の前で少年が動く。まるで少年みたく笑っているかのように光で銀色に輝くナイフが少年の体に寄せられる。

刺される。正吾はそう思いぎゅっと目をつむった。

「おやすみ」

微かに呟く少女の声が正吾の耳に届いた。

それでも正吾は目をつむり続ける。殺される。刺されて死ぬ。

そう何度か思って正吾は再び目を開けた。ナイフが自分に刺さるまでが遅すぎるのだ。

不思議に思い恐る恐る目を開けた正吾は、目の前の光景に目を丸くした。

いない。

今さつき自分の前にいた放火魔の少年が跡形もなく消え去っていたのだ。そのせいか、少年の影みたく見えていた少女がはつきりと、月を背にして見えていた。

何が起こったのかわからず正吾は右左と首を動かした。さつきまで

と変わらない住宅街。

逃げた、咄嗟に正吾はそう思った。だが、少女の言葉でそれが違うことを知らされる。

「少年は忽然とその姿を消し、死を覚悟した少年は放火魔が消えていたことに一刻の安堵を得ると立ち上がり、自分の帰る場所である施設へと戻って行くのでした」

目を見張る正吾に運乃は優しい笑みを湛えながら言った。

「さあ立って、和井正吾」

「なんで、どういうことだよ……なんで俺の名前知ってた。それにさっきのあいつは？」

動揺する正吾を下に見ながら運乃がノートにペンを置いた。
手元を見ずに何かを書く少女に正吾は再び同じような事を聞く。

「あいつはどこに行ったんだよ。お前知ってたんだろ」

「運命」

「は？」

運乃が正吾を見ずに答える。

「今日あいつは用事があったてここに来れなかった。だからいない。そういう“運命”だったのよ。あなたが聞いた話はただの噂話。見たことも全て幻」

悪魔が微笑んでいるかのような表情で淡々と語る少女に、正吾は少年以上の恐怖を感じた。

少女の言う限り少年はここにはいなかったことになる。何かわからない用事で。しかし、正吾の覚えでは確かにここにいたのだ。家に火を点けようとライターを持ち、阻止した自分を殺そうとした少年は間違いないここにいたのだ。そして自分が感じた恐怖も確かだった。

意味不明なことを言う少女に正吾は反論する。

「待てよ。あいつはさっきここに、」

震える声をあげた正吾の聲が突然消えた。しかし、声が消えたのではなかった。さつきは閉じられた口も、パニックで硬直した顔も、戦き震える体もなくなっていた。住宅街の街灯に照らされる道には誰も立っていない。

正吾自体が姿を消していたのだ。

物静かになる住宅街の一角。そこで唯一家の屋根に残る少女運乃は、持っていたノートをパタリと閉じた。

「突然の事に動揺に体まで揺らされた少年は、突如住宅街の中から消えたのでした。そこにいた痕跡すら残りもせず……さーてと」

そう呟いた運乃が屋根の上から周辺を見回した。

少し向こうの道では男女が仲よさげに歩き、別の方では人影がふらふらと歩いていた。それらに運乃は溜息を零すと、今この場にした少年を思い返す。

「和井正吾……あんなだったかな。どこかで辿る運命間違えたっけ？
ねえアトロポス」

運乃が閉じたノートを再び開いた。途端にノートが風に吹かれたかのようなすごい勢いでめくれ、止まったページに運乃はクスツと笑った。

和井正吾の名前が書かれ、全身が映った写真の貼ってある文の詰まったそのページで、運乃は笑んだ。

あなたは少年Bを殺すの？

心の中でそう呟いて。

6話：夜明けの一服1

暗い無表情の顔から蒼白に変わっていく空に吐く息が白い。それもそうかと七五三なしみは思った。

人差し指と中指に挟んだメンソール系のタバコのせいだ。だが、実際外が寒いせいで白くなっているのもあり、どちらのせいで息が白くなっているのかは不明瞭。なぜなら空気が低温だとしたら俺の体温とタバコは高温だ。今空気にとっては、三十六度七分の俺と俺以上に高温な七百度以上のタバコは物凄く暑苦しい二人でしかないはずだ。

と、そんなつまらないことを考えながら七五三は再び口に手を運んだ。明け方の静寂に包まれた空気に煙の混じった息を吐く。薄暗い町並みと灰色の煙が重なる。

明け方の町を七五三がビルの屋上から眺めていると後ろでガチャリと音がした。

「先輩こんな寒いところで帰る前に一服つすか？」

七五三は手すりに腕と体をかけたまま顔だけを男に向けた。

そこにはきつちりとした黒のスーツを着て、どこの会社でも使っているような青い紐のついた社員証をぶらさげた若い男がいた。今年入社したばかりの二十三歳の新入社員だ。苗字は袴田はかまた。七五三のことを先輩と呼んでいるが、そう呼ばせるように七五三が最初に言ったのだ。

袴田という男が七五三に近寄る。その手には缶コーヒーが二つあり、一つを七五三に渡した。

少しばかり熱めの微糖のコーヒー。いつも通りだたと七五三はポ

ケツトから百円を取り出した。それを男に返すと再び町の方へと振り返し、手すりに腕をぶら下げた。

男も同じようにして手すりに手を置いた。そして溜息を吐き一口だけ缶コーヒを啜る。

「終わったのか？」

「終わりましたよ。でも、これで遠野先輩が納得するかどうか」

「上司の顔色気にしてまで仕事するな。あんな奴のことなんかほっとけ」

「そう言えるのは先輩が部長だからじゃないですか」

七五三が苦笑いを返した。

そりゃ気を遣ったりはする。新人社員が上司に文句言っ得ることなんてほとんどない。だが、それも今年で終わる。辞めるのだ、遠野は。

それを顔には出さず七五三は笑った。

「だから先輩から遠野先輩に言ってくださいよ。僕のせいにしないようにって」

愚痴をこぼす男に七五三は苦笑交じりに答えた。

「考えとくよ」

「考えないでくださいよ……先輩が言う頃には遠野先輩いなくなっちゃうんですから」

「なら、それまでの辛抱だ。疫病神が去るまでのな」

「そんな神様いらないんだけどなあ」

男の言葉に笑って七五三はタバコを口にくわえた。何も知らないのだ、この男は。あと少し、あとほんの少しだ。そう思いながら夕

バコをふかす。

考えてることをなるべく表には出さず七五三は町並みを眺め続ける。

白くなっていく空に対して、町の明かりがついているも暗がりの中にいる町並み。何百回以上も見て慣れ親しんだ景色に七五三は何度でも惹きつけられていた。

「先輩好きですよねえ。この景色」

ぼんやりとしていた七五三に男が言った。

「ああ。明け方の空を眺めるのはいいぞ。一日が始まるのを見ながら物思いに耽^{ふけ}る」

「そうなんすかねえ……僕にはわかんないです」

首を傾げた男に七五三は笑い返した。

「まあお前がこの景色に耽^{ふけ}るようになったら終わりだよ」
「それってどういう意味ですか？」

七五三は黙った。こいつにはこれ以上話す必要がない。話している話じゃないと考えて止めた。その代りとして七五三は適当に答える。

「まあ人生色々やってやっだ」

「なんですかそれ」

「それよりも、昨日は鳴らなかつたな」

誤^{しま}魔化すように七五三は別の話へと変えた。

「え、ああ……確かに鳴らなかつたですね。先輩の勘外れましたね」
ニヤリと笑った男に七五三は納得のいかない顔で街並みを眺めた。昨日は確実に火事が起こるはずだったのだ。しかし、仕事をしていた間に聞こえたサイレンの音は一つもなかった。それを変に思いつつ七五三はそのことを口にした。

「確かだと思っただけだな。なんで外れたんだか……でもまあ人の家に火つけるような奴の考えなんてわかりたくはないな」
「同感です。なんで火なんてつけるんですかね？」

「さあな。それが面白いんじゃないのか」
「放火が？」
「ああ。でも俺は放火魔じゃないからな、分かんないよ」

言葉と共に七五三はタバコを足元に落とした。火を足で消して携帯灰皿の中に吸い殻をいれる。
分かっていたら苦労しない。そう言いかけた口にコーヒーを流し込んだ。そうして中身のない空になった缶を手で遊ぶようにぶらぶらとさせる。

休憩も終えた。朝日は遠い。そして寒い。
それらが七五三を会社から出させる気分にした。もう一つのことも。

「そろそろ帰るか」
「ですね」

コーヒーを飲みほした男と共に七五三は扉の方へと向かう。
疲れを出すように溜息を零す男の横で七五三はあることを考えていた。昨日起きなかつた放火のことだ。

昨日の夜確実に火事は起きる予定だった。なのにもかかわらず起

きなかった。そのことに七五三は納得できなかった。

連続放火の犯人は中学生。何年生かは知らないが性別は男で間違いなかった。中学校には週四日通っていて部活は写真部。学校に行っていない後の一日は町の探索。土日はどこかで適当に時間を潰している。家族は四人。両親と弟がいて三人とは不仲。原因は一度少年が不登校になったこととそれに付随する喧嘩。

それらから七五三は放火魔の少年の、簡単な動機について分かっていた。

よく聞く言葉むしゃくしゃしたからや、写真部にいるということもあって火事の写真が撮りたかったなどだ。その上でなぜ昨日の夜に放火しなかったのかを考えて、七五三はあることを思いついた。一日時間をあけてまでやりたいことがあったのではないか。それこそ騒ぎになっても可笑しくないほどのことをやるための準備を。

そう考えながら七五三は男と話しながらもなるべく急いで会社を出た。

会社から出た所で男と別れる。

「袴田今日はゆっくり休めよ」

「先輩もー。それじゃお疲れ様でした」

七五三が男に背を向け、しばらく歩きふつと笑いケータイを手にした。電話帳に登録してある谷中という名前の人物を呼び出す。

「俺だ。放火魔の件なんだが分かったことがある。今日デカいことをしてかすつもりかもしれないから、今からそいつの所に行け」

電話越しの返事に七五三は頷いた。

「証拠なんて後でどうにでもなる。先に身柄確保だ。いいな？」

返事が返り電話が終わると七五三は続けてもう一つへと電話する。

「里崎俺だ」

出た男の口調に七五三は呆れた。

「お前酔ってるのか？ 飲みにはいかない。っていうよりも店が閉まってる。俺のせいにするな。時間のせいだ。時間？ まだ五時半過ぎだ。それよりも谷部昇たにへのぼるって奴の周りに怪しい奴が現れるかもしれない。警察はいい、ほっとけ。ただし、南部未来なんべみらいと和井正吾かずいしょうごも対象には入れるな。それ以外の誰かが問題ある接触をしたら始末しろ。もちろん行方不明としてだ。頼むぞ」

七五三が電話を切る。一息つき背伸びと共に自分へ力を入れる。仕事だと自分へ言い聞かせて、七五三は目的の場所へと向かった。黒いコートの襟を正して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3383z/>

運命物語

2012年1月3日01時45分発行